

てわれわれの日常の否定しがたい現実の一部なのである。イエスは事実としての殺人とところに抱く存在滅却の暗い望みを同じレベルに置いている（『マタイ』5・21-22）。暗い望みに汚染されかねない他者は家族から友人、同僚、ライバル、敵に拡がり、あらゆる人間関係にまで行き渡っている（そしてなによりも神）。アダムの子カインによる兄弟殺しがエデン物語の直後に語られている。ユダヤ人 600 万人の虐殺まで『創世記』からただ一步にすぎない。『創世記』のほんの数行に人間の運命と哲学が詰まっている。鏡たる所以である。

意見

水落 健治

聖書を読み解釈するということ、とりわけ、人知を超えた「世界のはじめ」についての叙述である『創世記』を読み解釈するということは、他の書物を読み解釈することとは根元的に異なった、ある構造的な「破れ」ないし「裂け目」をはらんでいる。そこに語られていることがらが、読み手の把握力、存在そのものを超越しているがゆえに、書物が読み手に対し「自己の開示を拒む」という可能性が常に現存しているからである。

このことは、読み手に対し二つの意識を要請する。その第一は、「聖書を読み理解するためには、読み手自らが何らかの仕方自己を超え出なければならない」という意識であり、第二は、「読み手がいかに修練を積んでも、聖書の内容を十全な仕方理解することは不可能なのかも知れない」という意識である。

古代の人々は、人知を超えた永遠のことがらを語る〈ことば〉に対するこのような意識を持っていた。ソフォクレス『オイディプス王』の中の予言者ティレシアスについての形容「言葉に語りうるもの、語りえないもの、天の不思議、地の神秘、すべてを洞察してやまない予言者」（300行、藤沢令夫訳）などはその典型であろうし、プラトンが人知を超えた事柄をしばしばミュトスの形で語ったこと、またプラトン派のいわゆる「書かれざる教え」の背後にもこのような意識があったように思われる。さらに、ヘレニズム期の比喩的解釈もこのような脈絡で見ることができるかも知れない。そして、『創世記』の冒頭にも、「世界のはじめ」についての人知を超えたミュトスが

置かれているのである。

シンポジウムの席上で水垣氏が指摘されたギリシア教父の聖書解釈の幾つかの性格、すなわち、「聖書を現在のテキストとして受け取ること」、「神のことを神の語るように理解し、これを人に語ること」(Greg. Thaum.)、「神の書の心を読み取ること」(Greg. Naz.)もまた、このような古代的な意識の中で理解されるべきと思われる。教父たちがしばしば行う一見天衣無縫な比喩的解釈の背後には、聖書の理解者・解釈者としての自己の有限性についての深く鋭い自覚が存していたのであって、この自覚が「合理的・字義的解釈」をすら突破せしめる方向へと彼らを促していったのである。(教父たちが突きつけたこの原理的問題は、近代聖書学の聖書解釈によっても全く解消されることはない。解釈者としての自己を〈中立的第三者〉としてテキストの外に指定し、客観的にその内容を理解する、などということが、「解釈者としての自己を超え、その自己を呑み込んでしまうような事柄」を語るテキストの場合、原理的に可能なはずがないだろうからである。)

かかる意識による聖書解釈——すなわち、自己の有限性を自覚しつつ、聖書の語ることに耳を傾け、そこから学んだ事柄を有限な人間の言葉で可能な限り表現し、この作業によって自己をすら超え出て行こうとするような聖書解釈——は、「対話において成立する解釈」という語で表現することができる。聖書解釈者は、自己の有限性を自覚しつつ、無限者なる神の表現たる聖書のテキストに向き合うと共に、——神の言葉の無限性のゆえに——そこから学び知ったことがらを他者に伝達し、また他者に開示されたことがらを他者を通して学ぼうとするのである。

したがって、かかる聖書解釈にとっては、それがいかなる《場》において行われるのかということが本質的な事項となる。聖書解釈は、それが礼拝における説教・典礼において行われるのか、信徒の信仰生活の奨めとして行われるのか、学問的関心に基づいて行われるのか、外部からのキリスト教批判への解答として行われるのか、等々によって、多様な形態をとることになろう。解釈者が学び知ったことは、それが伝達される人格の多様性に応じて多様な形で伝達されることはけだし同然だからである。

要約すれば、教父の聖書解釈は「ペルソナの聖書解釈」であるがゆえに、それが行われる《場》に応じて多様な形をとる、とでも言うことができようか。